科目区分：国語教育専修・国際理解教育コース，日本芸能史
担当教員：小助川元太

能・狂言の歴史に触れる

担当教員：小助川元太

１．授業の概観

日本芸能史は、学校教育実践コース国語教育専修の国文学分野の選択科目であり、また、総合人間形成過程国際理解コースの日本アジア理解分野の選択科目でもある。昨年度までは、前任者が記紀歌謡から俳諧までの幅広い芸能を扱い、その史的展開について教授してきたが、稿者は日本の代表的な古典芸能であり、和の文化を象徴するものの一つである能狂言にテーマを絞り、渡来芸能としての散楽から徳川幕府に式楽として保護されるまでの、猿楽能の史的展開を辿ることにした。

これには、愛媛・松山が江戸時代から能楽の盛んな地であったことを踏まえ、学生に地域文化を理解してもらうためのきっかけとしたいという思いもあった。また、国語の新しい学習指導要領では「伝統的な言語文化」を重視し、小学校高学年から簡単な古文が導入されることになっているが、このような流れの中で、以前から参考程度に教科書に掲載されてきた〈柿山伏〉などの狂言台本も、新しい検定教科書では授業で本格的に取り上げる教材として扱われている。これから教壇に立つ学生には、能狂言に関する正しい知識を身につけさせる必要があると考えている。

さて、今年度のシラバスに記載した授業の目的と目標は以下のとおりである。

【授業の目的】

能狂言の形成・展開を学び、テキストを読解することによって、日本を代表する芸能を深く知り、和の文化を見直すきっかけとする。

【授業の目標】

１．能狂言に関する基礎知識を身につける。
２．能狂言が他のジャンルの芸術に及ぼした影響を説明することができる。
３．テキストの読解を通して，能狂言に関する知識を深める。

上記の目的・目標を達成するべく、以下のような授業と評価を行った。

【授業の進め方】

１．能・狂言の歴史→テキスト（石井倫子『能・狂言の基礎知識』）を用い、適宜資料を補いながら講義を行う。
２．作品講読→能の台本（謡曲）を読む。
３．作品の鑑賞→能や狂言の実際の舞台を DVD で鑑賞する。

【実際の授業内容】

第 1 回：ガイダンス。授業の進め方
第 2 回：散楽から猿楽へ
第 3 回：神事芸能と演劇
第 4 回：翁猿楽（『風姿花伝』第四「神儀云」）
第 5 回：観阿弥の登場
第 6 回：**観阿弥の大改革・〈自然居士〉講読**
第 7 回：世阿弥と義満
第 8 回：世阿弥の伝書
第 9 回：世阿弥の能・〈忠度〉講読
第 10 回：元雅について・〈隅田川〉講読
第 11 回：世阿弥と元雅の論争・音阿弥
第 12 回：音阿弥と義教
第 13 回：金春禅竹の能・〈定家〉講読
第 14 回：風流能と手猿楽
第 15 回：試験と解説

【成績評価】

試験（60%）、レポート（20%）及び授業に取り組む姿勢（20%）により、総合的に評価する。

２．授業評価法

授業評価については、試験前の第 14 回目の最後に匿名のアンケートを行った。（23 名）質問項目は下記のとおりである。

１．授業に真面目に取り組んでいましたか？
２．授業内容は理解しやすかったですか？
３．授業で学んだ内容で、とくに興味を持ったところやおもしろかったところは？
４．３について、どのようなところに興味やおもしろさを感じましたか？
５．意見・要望・感想・メッセージなどがあれば、書いてください。

３．授業評価結果

１．授業に真面目に取り組んでいましたか？

ア　真面目に取り組んだと思う。　**（５名）**
イ　ときどき集中していなかったときもあった。　**（１８名）**
ウ　あまり真面目に取り組んでいたとはいえない。　**（０名）**

２．授業内容は理解しやすかったですか？

ア　理解しやすかった。　（１３名）
イ　ふつうだった。　（７名）
ウ　難しかった。　（２名）
カ　その他　（１名）

３．とくに興味を持ったところやおもしろかったところは？（以下抜粋）

・観阿弥と世阿弥の登場
・〈隅田川〉の演出に関する世阿弥親子の論争
・能と歴史との関係
・DVD で実際の狂言を観たこと。

４．どのようなところに興味やおもしろさを感じましたか？（以下抜粋）

・能の歴史について知った上で台本を読むと、意味がわかり、また、どのようにして成立していったのかもわかるところ。
・〈隅田川〉で、最後に子役を出すか出さないかを討論したとき、色々な人の意見が聞けておもしろかった。また、演出の一つ一つにも、作った人のこだわりや思い入れがあることが分かって作品の見方が変わってきた。
・他の学生と意見交換できたこと。実際にそれを観た人もいて、とても参考になる意見があった。
・能が権力者や時代の流れ、能役者の中でトップが変わるにつれて、様々な形態に変わっていったところ。

５．意見・要望・感想・メッセージ（以下抜粋）

・今まで能に触れる機会はほとんどなかったので、毎回新しい知識を得ることができました。日本の伝統芸能に触れることで、日本の文化の奥深さを感じることができました。
・観阿弥・世阿弥という名前は今まで聞いたことがあったが、この授業でもっと深いところまで知ることができた。
・おもしろい授業でした。ありがとうございました。今度実際に能を見てみたいと思いました。
・授業に沿ったテキストを使っているので、詳しく知りたいことについて自主学習ができたので良かったです。DVD などもときどき見せていただき、今まで知らなかった能についてとても興味がわきました。
・「能」という、普段触れる機会のないものについて取り上げ、掘り下げて学ぶというのはとても新鮮でおもしろかったです。よく疑問に思ったり意味が分からなかったりもしましたが、そのつど説明が入ったので、時代背景とともに理解できたと思います。
・また誰か少数の人物や短い時代に視点を当てた授業を受けてみたいと思いました。
・もう少し色々な能や狂言を見てみたかったです。能・狂言をわかりやすく成り立ちから学ぶことができたのでよかったです。今まであまり“芸能”というものに興味を持つことができなかったのですが、これからは少しずつ生の芸能に触れていこうと思えました。
・DVD も交えてくださったので、実際の狂言が見られておもしろかったです。最初は能と狂言の違いも分からなかった私ですが、今ではチャンネルを変えているとき、狂言の舞台が映っていると思わず手を止めてしまうようになりました。
・もう少し色々観て、それについての解説があればよかったなと思いました。ビデオは観ておしまいということが、わりと多かった気がするので。

４．まとめ

自由記述が多い方が、学生の正直な感想や意見がくみとれるのではないかと考えたため、上記のようなアンケートの体裁にしたが、今年度の受講生は授業態度が真面目だったので、１の項目はあまり適切な質問ではなかったかもしれない。ただし、イの「ときどき集中していなかったときもあった」が圧倒的に多かったのは、稿者の授業が説明中心で単調だったときが何度かあったことを示している可能性が高いため、その意味では、自分の授業方法を反省する材料になった。また、２の項目で、比較的アの回答が多かったのは、学生の多くが能や狂言についてほとんど予備知識をもっていないということを踏まえ、できるだけわかりやすく、興味を持ってもらえるように工夫をした結果であると受け止めている。とくに授業での工夫が功を奏したと思われるのは、世阿弥の『花鏡』に見られる「初心忘るべからず」の意味を、伝書をグループで口語訳させるなかで理解させる方法や、３や４の回答にある、“〈隅田川〉の演出に関するディスカッション”を行ったことなどであろう。能狂言のように、ふだん触れることがなく、また、古典の知識がある程度必要な能狂言という芸能を身近なものに感じてもらうためには、グループで意見を交わしながら考えるという作業を導入することが効果的だと実感した。

また、５の中で、DVD 鑑賞についてもう少し種類を見たかった、あるいは、解説がほしかったという意見があったが、たしかにその通りだと反省している。とくに限られた時間の中で解説まで行うのは難しいが、来年度は授業内容を整理して、改善したいと考えている。